

〈論文〉

板橋宿の研究動向とフィールドワーク授業の実践例

遠藤 ゆり子

要約

本稿は、淑徳大学人文学部歴史学科の2018年度授業「日本地域史」において、江戸時代の中山道沿いにあった宿場町の一つ、板橋宿周辺地域の研究史を整理した上で、同地域で行ったフィールドワーク授業の概要とその意義をまとめたものである。

板橋宿は、平尾宿・中宿・上宿の3つの宿から構成され、それぞれの宿に名主が存在するなど、各宿が幕府による支配組織として機能していた。また川越街道の分岐点でもある交通の要所平尾宿には、加賀藩下屋敷が置かれていたことでも知られる。同地域は、近世から現代にいたるまで板橋区の中心地であり、区内に所在する大学として、板橋宿の歴史を学ぶことは大いに意義があると思われる。だが近年、中宿名主の飯田侃家で多くの文書が発見されたこともあり、板橋宿は区内で最も歴史的研究が進んだ地域となっている。

そこで、授業で板橋宿の歴史を学ぶにあたり、まずは重要な研究史を整理した。その上で、フィールドワークを通して同宿の概況をつかむことを目的とする授業を実施した。本稿はその実践例であり、1章では筆者が把握した板橋宿の研究動向をまとめ、2章では授業の概要を述べた。本稿を踏まえて、来年度は板橋宿に関する史料を読み、分析を加える力を養う授業を行っていきたいと考えている。

キーワード

板橋宿・フィールドワーク・授業・研究史・地域史

はじめに

本稿は、淑徳大学人文学部歴史学科の2018年度（前学期）の授業「日本地域史」において、江戸時代の中山道沿いにあった宿場町の一つ、板橋宿周辺地域の研究史を整理した上で、同地域で行ったフィールドワーク授業の概要とその意義をまとめたものである。昨年度から開講している「日本地域史」の授業では、板橋区内の一地域を対象として、地域の歴史を追究する手法と意義を考えることを目的としている。初年度の2017年度は、キャンパスの徒歩圏内である、板橋区前野町・志村・ときわ台地域を考察の対象に据えた。2年目の本年度は、板橋区の中心的な地域である板橋宿周辺へフィールドを移し、

平成30年10月23日受理
えんどう ゆりこ：淑徳大学 人文学部 准教授

考察を加えることとした。

板橋宿は、江戸を出発して中山道最初の宿駅として、また京都方面からやって来た際には江戸へ入る前の最後の宿駅として栄えていた。慶安2～3年(1649～50)には、川越街道の上板橋村に対して下板橋村と呼ばれていたことが知られ、その頃には板橋は上・下に分かれていた¹。17世紀後半に加賀藩が板橋宿に下屋敷を構え、参勤交代などの見送りと出迎えの場としても利用したといわれる。そのような板橋宿全体の範囲は、中山道沿いに南北へと長く、江戸寄りの南から平尾宿・中宿・上宿の3つの宿から成り、周囲に根村・山中・茶屋・馬場の集落があった。南の平尾宿は、川越街道の分岐点にもなっており、交通の要衝といえる。

3つの宿にはそれぞれ名主がおり、近世後期の段階では、平尾宿は豊田市右衛門家、中宿では飯田宇兵衛家、上宿では板橋市左衛門家がほぼ世襲で名主を務めていた²。これらの名主の名から、市右衛門組(平尾)・宇兵衛組(中宿)・市左衛門組(上宿)の3つの組が組織され、支配単位として機能していたとされる。また、本陣は中宿に1軒、脇本陣が上宿・中宿・平尾宿に各1軒置かれ、寛政12年(1800)の旅籠屋は68軒であったという。中宿を中心とする板橋宿のあり方は、明治17年(1884)12月、上宿石田屋から出火した火事により、上宿・中宿が多くの被害を受けたことで大きく変化した。同19年に、板橋3丁目19番地に北豊島郡役所が置かれ、平尾に町の中心は移っていった³。

既に板橋宿の歴史については、『板橋区史 通史編上巻』(板橋区、1998年)などの編纂を通して、多くのことが明らかにされている。特に中宿の飯田侃家文書が発見されてからは研究も進み、その成果は板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編『文化財シリーズ第98集 板橋宿の歴史と史料―宿場の街並みと文化財―』(板橋区教育委員会、2017年)などにまとめられている。また加賀藩下屋敷については、板橋区郷土資料館 小西雅徳編『板橋区・金沢市友好交流都市協定締結記念 中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』(板橋区立郷土資料館、2010年)が、寺社については板橋区教育委員会事務局社会教育課文化財係『文化財シリーズ第36集 板橋区 神社』(板橋区教育委員会、1981年)、同『文化財シリーズ第39集 いたばしの寺院』(板橋区教育委員会、1982年)などがある。

このように、板橋宿は板橋区内においても比較的研究が進んだ地域だといえる。そのため本年度の授業では、まずは関係する文献を収集して研究状況を把握すること、現在における史跡の現状を踏査して確認することに重きを置くことにした。なお、本授業を履修した学生は2～4年次生までの合計20名である。

1 板橋宿研究の現在

2 「はじめに」でもふれたが、既に板橋宿については『板橋区史』のほか、区史編纂にもなって発表された論考や区教育委員会の刊行物に詳しく、また区内の郷土史家による『板橋史談』も注目される。ここでは、後述する本年度の授業の内容と関わる問題に絞って、主な研究史を整理しておきたい。

(1) 板橋宿の概要と旧中山道

板橋宿の概要に関する初期の研究としては、板橋史談会による『武州板橋誌』第一編(1976年)をあげられる。近代の古写真と変わりゆく高度経済成長期の状況を比較し、寺社や施設の所在地などを確認している。中山道沿いの板橋宿の街並みを復元したものとしては、1983年に刊行された『いたばしの古道』がある⁴。そこでは『中山道宿村大概帳』の記述から、天保14年(1843)の人口が2448人、家数573軒、本陣1、脇本陣3、旅籠屋54軒であるといった概況が述べられている。その上で、英泉

の『木曾街道板橋之駅』、雪旦の『江戸名所図会』にある「板橋駅・乗蓮寺」「板橋」の絵図などにより、当時の様子が垣間見られることが紹介され、文久元年(1861)に、皇女和宮が江戸へ向かう際に板橋宿の本陣飯田家へと立ち寄った時の様子についても述べられている。

1990年頃には、小花波平六氏が江戸時代末期に刊行された何種かの「道中記」に注目して、板橋宿の日常を描こうと試みた⁵。そして、お伊勢参りから帰ってきた江戸の客が、平尾の川越伊勢屋方で宴を開いている事例などから、板橋宿は「サカムカエ」が行われるような江戸の境と認識されていたと指摘した。また、『新編武蔵風土記稿』・『天保二年宿内明細書上帳』を分析し、他の宿場町同様に男女比の人口は女性の方が多く、店や職人の様子が知られ、寺社数が11から10に減少したとする。幕府が編纂した『中山道分間延絵図』、『江戸名所図会』『商家高名録』などに基づき、板橋宿の街並みや景観復元も行っている。大正初期から昭和初めの板橋宿を描いた飛田啓之助氏の「中山道板橋宿跡絵図」や、聞き取り調査の成果などから近代・現代への展開にも言及している⁶。同じ頃、中西真郎氏は板橋宿を踏査した際の状況を『板橋史談』で報告しており、この段階における板橋宿の形跡を窺い知ることができる⁷。

平成4年(1992)には、板橋区立郷土資料館の開館15周年を記念した特別展『中山道と板橋宿一夜明け前の世界一』が開催され、同名の図録では小花波平六氏が近世から近代にかけての板橋宿について、小林保男氏が加賀藩下屋敷の変遷について整理している⁸。なお、平成14年(2002)には中山道の開設400周年を記念し、街道筋の博物館と共同企画された「中山道展」が開かれ、それまでの研究成果が紹介された⁹。

そしてこの頃、「飯田侃家文書」(中宿名主・飯田宇兵衛家文書)が発見されたことにより、板橋宿の研究は大きく進展していく。中野達哉氏は、明治3年(1870)に宇兵衛組で作成された宗門人別帳「午人別帳」を使って、近世末期に遡れると思われる明治初年における宿内の住民構成を分析した¹⁰。また吉田政博氏は、19世紀前半の史料である『我衣』(加藤曳尾庵著)・「名主役入祝儀受納帳」(「飯田侃家文書」)、「諸国道中商人鑑」などを用いて、同史料に登場する板橋宿の人々を整理・分析し、街並みの景観復元を試みている¹¹。板橋宿の出入り口に設置されたという木戸・関門については、中村陽平氏が注目している¹²。中村氏は、これまで板橋宿にあったとされる大木戸は存在しなかったこと、幕末の木戸・番所の設置場所と置かれた時期を明らかにした。

板橋宿内の施設や建造物などの跡地の所在を比定したものには、30数年にわたる聞き取り調査などの成果を著した玉井健三氏の研究がある¹³。玉井氏が明らかにした各施設、建造物の比定所在地を抜き出し、他の研究成果と併せて一覧表に示したものが表1である。なお、授業でも使用した後掲の地図は、表1に示した景観復元を行った研究と授業での踏査の成果をもとに作成している。また小字名の現在地比定や地名の由来などを調査した研究には、大澤鷹邇氏の「写真探訪 板橋の地名」や『板橋の地名』があり¹⁴、『板橋区史』でも中山道沿いの景観について概観している¹⁵。

前述の「飯田侃家文書」は、板橋宿の歴史を知る上で鍵となる史料であるが、『板橋区史』資料編の刊行時期に発見されたため、その研究成果は『板橋区史』に全てを反映するには至らなかったという。そのため、同史料の一部を紹介した板橋区教育委員会の『文化財シリーズ第98集 板橋宿の歴史と史料―宿場の街並と文化財―』が刊行された意義は大きい。「飯田侃家文書」の発見によって進展した研究の成果を踏まえ、中世から明治にかけての板橋宿の変遷をまとめ、名主家・本陣の分析を進めており、同書は現在における板橋宿研究の到達点といえよう¹⁶。

【表1：板橋宿の施設・建造物跡の現在地比定】

施設・建造物名	現在地	現状	典拠
大木戸跡	本町27番地	わらや化粧品店前	武州板橋 ¹⁷
問屋場（荷物貫目改所）	仲宿48番地付近		伊藤1966 ¹⁸ 、玉井2005 ¹⁹
下総屋（自身番）	仲宿51番地18号 ²⁰		玉井2005
高札場	仲宿49番地8号辺り	リサイクルショップ	玉井2005
本陣（飯田新左衛門家）	仲宿47番地付近	スーパーマーケット	伊藤1966、同1994 ²¹ 、 文化財 ⁸ ²² 、玉井2005
	仲宿47番地10号		区HP ²³
仲宿名主・脇本陣 （飯田宇兵衛家）	仲宿53・54番地		伊藤1994
	仲宿53番地		玉井2005
	仲宿54番地		区HP
上宿名主・脇本陣 （板橋市左衛門家）	仲宿49番地		武州板橋
	本町28番地	1972年の河川改修により、 石神井川下に位置する	玉井2005
平尾名主・脇本陣 （豊田市右衛門家）	板橋3丁目 ²⁴	マンション	玉井2005
	板橋3丁目15番地		区HP
平尾追分	板橋3丁目1番地	りそな銀行	玉井2005
平尾の一里塚	板橋1丁目54番地・ 北区滝野川6丁目	果物屋・電気屋辺り	玉井2005
前田家下屋敷大御門		都立北園高校	玉井2005
前田家御殿		都営地下鉄線新板橋駅付近	玉井2005
前田家御貸小屋		北園高校から板橋第四小学校に かけて並ぶ	玉井2005
前田家の弁天様		漆坊弁財天	玉井2005
前田家の大池		板谷公園・板橋大吾中学校付近	玉井2005
幕臣近藤登之助の抱屋敷		上宿岩の坂をのぼりつめた坂上 左側	玉井2005
乗蓮寺門前		カネモ陶磁器店辺り	玉井2006 ²⁵

4

（2）名主・本陣・脇本陣と近藤勇の墓

かつて板橋宿に関する資料は、明治17年（1884）の板橋大火や明治23年（1890）の飯田新左衛門家の火災、さらに戦災で焼失したとされ、ほとんど知られていなかった。だが、昭和29年（1954）に刊行された『板橋区史』近世編を担当した伊藤専成氏は、仲宿の飯田新左衛門家・同宇兵衛家、上宿の板橋市左衛門家、平尾宿の豊田市右衛門家の調査を進め、その概要をまとめている²⁶。その後も東京都教育委員会および板橋区によって、古文書調査が進められ、飯田家に所蔵されていた資料が少しずつ明らかになっていった。そして平成6年（1994）、品川区立品川歴史館・足立区立郷土博物館・新宿区立

歴史博物館・板橋区立郷土資料館が合同開催した「江戸四宿展」の資料借用のため、板橋区教育委員会の吉田政博氏が飯田侃家を訪問した際、資料群の存在を確認することとなる。後日、板橋区教育委員会によって本格的な確認調査が行われた。「飯田侃家文書」の発見までの経緯と文書群の概要については、吉田政博氏と中野達哉氏による史料紹介に詳しい²⁷。

平成10年(1998)に刊行された『板橋市史 通史編』の編纂事業によって、近世後期の板橋宿の概要と支配体制はかなり明らかになってきた。前述のように、宿内で3宿に分かれ、江戸に近い平尾宿は豊田市右衛門家、中宿は飯田宇兵衛家、上宿は板橋市左衛門家が名主を務め、それぞれ組を組織していた。宿駅業務を行う問屋は、近世前期は孫右衛門(豊田市右衛門家)・新左衛門(飯田宇兵衛・新左衛門家)の借地二カ所であったが、元禄7年(1694)に合併して中宿に置かれたという(「中山道宿村大概帳」『板橋区史 資料編3』269号文書)。

『板橋区史』で板橋宿に関する記述の執筆を担当した中野達哉氏は、名主家が3家見られる初出が明和4年(1767)であるとし、近世前期の状況についても検討を加えている²⁸。中野氏によれば、元禄期には組は2組で、中宿の飯田新左衛門家、平尾宿の豊田孫右衛門家のみが「名主」「問屋」として確認でき、天和3年(1683)にはもう1名の名主もいた。だが、天和2年(1682)の火事で名主・問屋は3名から2名に減少し、豊田孫右衛門は天和期以降に新たに名主・問屋につき、上宿の板橋市左衛門家は、宝暦13年(1763)には問屋として確認できるという。近世に入って板橋宿へ移住したという飯田家によって、「古町」とも呼ばれた中宿を中心に宿場運営が行われる状況から、周辺へと宿場が拡大していくなかで2つの名主家が加わったと指摘する。

だが近年、中村陽平氏は近世中後期になって、飯田新左衛門家を含めた4軒が本陣(1軒)・脇本陣(3軒)に再設定されたと指摘している²⁹。飯田家は大坂の陣以降、おそらく元和年間以降に板橋へ移った。その頃から御林の管理を任されており、御茶屋守を担っていたと想定できるという(「飯田侃家文書」)。近世初期から本陣を務めていた3軒は次第に中絶・廃絶し、飯田家は宝暦年間以降から天明年間頃までに本陣になった。だが幕末には、飯田新左衛門家(宝永元年・1704年に分家³⁰)は当主不在となり、脇本陣であった飯田宇兵衛家(本家・名主)がその代わりに務め、同家が和宮の宿所や東山道軍の本営に設定され³¹、その門前で近藤勇の首実検も行われたことも知られるとする。

中村氏はさらに分析を進め、両家の系譜を復元して新左衛門家を宇兵衛家の「分家」ではなく「別家」と呼ぶべきだとし、両家の関係を追究した³²。そして伊藤専成氏が指摘したように³³、「新左衛門」が飯田家の世襲名であり、板橋宿の「役儀」を担う家として名主役・本陣を務めており、飯田家の別家は惣領家から「世襲名」の「新左衛門」を分けて継承したと指摘している。これにともない、享保年間(1716～1736)には菩提寺も変更され、宇兵衛家の菩提寺は文殊院から乗蓮寺に替わり、新左衛門家は文殊院を引き継ぐことになったという。ただ宇兵衛家の菩提寺は、元来は安養院であったが乗蓮寺への「転宗」であった可能性もあるとする。通説となっている飯田「宇兵衛」家が名主役・脇本陣を、「新左衛門」家が本陣役を務める体制は、江戸中後期に確立していくことも明らかにし、両家は「諸役を補完」する関係にあったと位置づけた。明治初期の右兵衛家については中野達哉氏の論考があり、乗蓮寺を檀那寺とし、多大な耕地を所有しつつ公職に就いていたこと、地域の有力者として旧大名家などとの交流を深めていたことなどの実態を究明している³⁴。

最後に名主家に加わった上宿の板橋氏は、中世から上・下板橋地域(板橋郷)における流通を支配し、軍事拠点を置いていたことが知られる。江戸時代には一部が土着したほか、旗本や戸田家家臣となった家、牧野家臣になった家があり、武士層では互いに交流があったことも指摘されている³⁵。

平尾宿で脇本陣・名主を務めた豊田家は「平尾の玄関」とも呼ばれ³⁶、先祖は三河から徳川家康とと

もに移住したと伝える。小林保男氏は、豊田家の系譜を墓碑・過去帳・古文書などから復元し、板橋宿内の寺院3寺(観明寺・東光寺・乗蓮寺)を菩提寺とする3つのグループが見られることを指摘した³⁷。当主は代々孫右衛門、市右衛門、喜平治を名乗り、江戸・明治期を生きて明治28年(1895)に没した当主の喜平治は、当時流行していた煎茶を趣味として多くの資料を残した。これらからは、当時の煎茶の作法についても窺うことができる³⁸。ただ、同家には天明8年(1788)3月銘の棟札が伝来しており、天明5年(1785)の板橋宿の大火で焼失して再建された可能性が指摘されており³⁹、そのために伝来史料が少ないものと思われる⁴⁰。

なお、豊田家には、慶応4年(1868)4月に下総流山で捕縛された近藤勇が板橋で処刑されるまで、勇が幽閉されており、当主市右衛門の孫(喜平次の娘)とみ(昭和21年(1946)没)は、勇にかわいがられたという⁴¹。

(3) 遊郭と旅籠・遊女と飯盛女

中野達哉氏は、元禄期に遊興地として栄えた板橋宿のうち、平尾宿の名主・問屋・脇本陣を務めた豊田家に注目し、同家にあった襖の下張り文書などから同家の屋敷・旅籠屋・寺院の間取り、宿場絵図を検討している⁴²。板橋宿の旅籠屋は、天保14年(1843)には54軒あったと伝わるが、22軒分の間取りが伝来し、そのうち18軒には「見せ」があり、飯盛旅籠屋であったと考えられるという。文政年間には飯盛旅籠屋が18軒であったといい(『我衣』)、見取り図と合致すること、見取り図から飯盛旅籠屋の接客施設は敷地の北側に設けられるという特色があることを指摘した⁴³。なお、これらの見取り図・絵図は幕末に皇女や公家の娘が下向する際に、宿場調査で作成された可能性が高いとする。長谷川正次氏によれば、天保期以降の『岡場遊郭考』には遊女屋が28軒、明治3年(1870)には16軒に飯盛女が41名みられるという⁴⁴。

また、中宿の名主飯田宇兵衛家からの分家に旅籠平野屋飯田家がある。小西雅徳氏・小島有紀子氏の研究によれば、幕末の平尾宿に大旅籠として見え、明治初期には遊郭経営をしており、代々権十郎を称していたが、大正期の当主は飯田綱次郎であった⁴⁵。同家には、幕末の4代目当主権十郎の娘と思われる人物が、加賀藩へ奉公した際に拝領した雛道具が伝来する。同家と加賀藩とのつながりや、当時の加賀藩の婚姻の様子も知られる資料である。

板橋の遊郭については、『板橋史談』に佐藤正一氏の「板橋遊郭偶考」が連載されており、聞き取り調査の成果なども注目される⁴⁶。なお、仲宿の遍照寺には、明治初期の上宿に住んだという町絵師柴左一の手による「遊女道中扁額」が伝わっている⁴⁷。また明治期の貸座敷(遊郭)については、藤武蔵楼の写真や同遊郭に所属したと思われる女性、新藤楼の図面が板橋区立郷土資料館の『特別展 板橋の近代のあゆみ』で紹介されている⁴⁸。

6

(4) 加賀藩下屋敷

屋敷地の範囲は、現在の加賀1・2丁目、板橋4丁目の全域、板橋3丁目・仲宿の部分、一部は北区にまたがっていた。建物は藩主の御殿をはじめ、東南部(現都立北園高等学校付近)に集中していたという⁴⁹。下屋敷に関する研究は、2001年段階で明らかになっていた史料および文献については、海野修氏によって整理されている⁵⁰。それによれば、まずは北園高等学校の社会科教員であった奥山正氏の研究を挙げられる⁵¹。奥山氏は、板橋平尾邸の変遷を次のように整理した。加賀藩が4代藩主前田綱紀の時、延宝7年(1679)2月に平尾邸を拝領してから、他の江戸屋敷を上地して、天和3年(1683)春に下板橋宿・十条村・滝野川村などの百姓入会地であった土地を拝領し、その後も拡張されて石神井

川を囲む広大な面積を得た。平尾邸は、参勤交代通路の中山道に位置し⁵²、石神井川の舟運を利用して本国加賀と結ばれるとともに⁵³、作物を上屋敷へ供給する役割や、鷹狩のための鷹部屋も置かれたことが指摘されている。また、下屋敷の敷地の範囲についても、近世の絵図と近代の土地台帳などから比較検討を加えて明らかにしており、東北から北方の境界が、現在の北区と板橋区の区境に相当するなど、現代への影響も窺えるという。

昭和60年(1985)には、板橋区文化財担当の社会教育指導員であった小林保男氏らによって、金沢での資料調査が行われており、その成果は『文化財シリーズ60集 加賀藩江戸下屋敷 平尾邸拝領一件』にまとめられている⁵⁴。さらに平成4年(1992)、板橋区史編さん事業として、金沢市での史料収取調査などが行われ、吉田政博氏によって新たに確認された平尾邸拝領当時の絵図が紹介されている⁵⁵。

小花波平六氏は、天明3年(1783)頃と思われる時期から、下屋敷に住んでいた前田家六代藩主の前田吉徳の七女暢姫のぶひめ(祐仙院)に仕えていた、板橋宿本陣の飯田家の女性静に注目している⁵⁶。静は寛政9年(1797)3月に25歳で病没し、板橋宿の文殊院に葬られ、「飯田静の碑」が建てられている。既にこの碑については、中西真郎氏が碑文を紹介していたが⁵⁷、小花波氏は改めてこの碑の詳細を報告するとともに、加賀藩下屋敷と板橋宿の人々による日常的な交流を描いている。海野修氏も、幕末の下屋敷に詰めていた足軽の永田益次郎や、足軽たちと板橋宿周辺の住民との婚姻について紹介している⁵⁸。また海野氏は、明治3年(1870)頃に加賀藩の士族らが金沢県庁へ提出した「先祖由緒并一類附帳」によって、下屋敷に詰めていた足軽の家の系譜や日常的な交流などについても分析している⁵⁹。

区史編纂に携わった長谷川正次氏は、下屋敷の変遷を年表風に整理した上で、下屋敷の財政状況を分析し、加賀藩が中屋敷よりも下屋敷を重視していた可能性を指摘した⁶⁰。一方、辻崎久哲氏は、奥山正氏らの研究成果を踏まえて⁶¹、加賀藩の各江戸屋敷の変遷を分析し、大名家の江戸屋敷研究の成果と比較しながら、上・中・下屋敷の特色を明らかにした⁶²。明暦の大火によって大名屋敷が江戸郊外へ移動していくなか、加賀藩の参勤経路が変更されたこともあり、加賀藩江戸屋敷は中山道筋へと屋敷地を集中させていった。天和大火以降、加賀藩は既存の屋敷地の一部を上地し、延宝7年(1679)に加賀藩が拝領していた板橋平尾邸の隣接地を拝領していく。それにより、加賀藩江戸屋敷は本郷の上屋敷、駒込の中屋敷、板橋平尾の下屋敷、深川黒江町の蔵屋敷といった四屋敷体制を整えることになった⁶³。特に上・下屋敷の敷地面積が他家の屋敷地に比べて広大であり、他家では中屋敷が担う隠居藩主や嗣子の居住地としての役割を、上屋敷が担うなどの特色があったという。

また辻崎氏は、板橋平尾邸の動向と特色についても考察を加えている。平尾邸は、幕府へ届け出していない内証借地分があり、これをめぐって平尾邸周辺の平尾村・馬場村・山中村との間で問題が生じていた。そこで加賀藩では村々へ相応の金額を支払い、実質的には屋敷地を村々から買得することで問題を解決することになったという。そのようにして広大な屋敷地となった平尾邸は、他家の大名屋敷と異なって表長屋が巡らされておらず、築山がいくつもある広い庭園を耕作地で囲われていた。前述のように、平尾邸には暢姫(祐仙院)が居住したことはあるが、それ以外に藩主やその家族などが居住した形跡はなく、藩主の休息・遊興、家臣の調練場、上屋敷へ送られる作物の耕地、深川蔵屋敷の補完的な役割を担っていたことが明らかにされている⁶⁴。

前述のように、吉田政博氏は板橋区史編さんの調査で下屋敷の絵図を確認し、これを紹介していたが、さらにこの絵図によって下屋敷の景観を復元し、その特色を明らかにした⁶⁵。石神井川を利用した水車や(現加賀1丁目16番地付近)、池泉回遊式庭園の泉水と高山・大山と称された築山(現加賀1丁目8番地)、藩主の御殿(現板橋4丁目4・5番地付近)の位置などが確認されている。一方小西雅徳氏は、

幕末の下屋敷の御殿下と回遊式庭園の間に角場(的場)が作られるなど、西洋式の調練、大砲鑄造が進められたことを紹介している⁶⁶。

江戸幕府が崩壊して武家地が官収されることとなり、加賀藩下屋敷も明治4年(1871)に没収された。慶応年間(1865~68)から、藩の許可を得て敷地内で開墾を行っていた小松了従は、開墾を目的とする耕地の払い下げを求め、既に耕作中の土地の一部が下付された。了従は八丈島での流罪を許された宇喜多家の人々を開墾に動員している。この間に、小松了従が東京府知事に申請した時の文書は、2冊の資料集にまとめられている⁶⁷。

(5) 寺社

板橋区内の寺社については、既に板橋区教育委員会の文化財シリーズで所在地や由来などの詳細が紹介され、『板橋区史』にも概説があり、『新編武蔵風土記』に載る寺院が一覧表化されている⁶⁸。また、『いたばしの街道めぐり』にも、遍照寺・智清寺・日曜寺について述べられている⁶⁹。ここでは、それらの研究に基づいて板橋宿内の寺社の特色を整理しておきたい。

昭和46年(1971)に赤塚へ移転した乗蓮寺については、板橋区教育委員会によって、同寺伝来文書の史料集が刊行されている⁷⁰。また前述のように、平尾の豊田氏の墓地は江戸初期には観明寺、その後に東光寺、江戸中期以降は乗蓮寺へと変更されている。これは本家・分家筋があり、それぞれ檀那寺を抱えていたためと考えられている⁷¹。また同寺の石仏の礎石には、享保5年(1720)の加賀藩下屋敷の足軽と確認できる「田村三右衛門」など、加賀藩下屋敷の足軽や板橋宿の人々の名が見えるという⁷²。現在同寺に所在する宇喜多秀家の供養塔と、明治期における板橋の開発と宇喜多一族の関係につ

【表2：板橋宿の寺院】

寺名	所在地	宗派	本山	山号	創建時期	開山	中興	本尊	備考
観明寺	板橋3-25-1	新義真言宗	長谷寺 (奈良県初瀬町)	如意山	延宝5年(1677)、 暦応1年(1338) と伝わる	慶浄	頼性阿 闍梨	正観世音 菩薩	境内にある稲荷神社は、も と加賀藩下屋敷内にあっ た。寛文元年の庚申塔あり。
東光寺	板橋4-13-8	浄土宗	増上寺(港区)	丹船山	開山、延徳3年 (1491)寂	天誉了聞		阿弥陀如来	元の境内は下屋敷内の「舟山」 辺りという。寛文2年の庚申 塔あり。字山ノ上から移され た、享保4年(1719)銘の 追分地蔵がある。
文殊院	仲宿28-5	真義真言宗	安養院末→ 長谷寺	幡場山	寛永2年(1625) 慶恵寂、寛文12年 (1672)性恵寂	慶恵または 性恵		文殊菩薩	開基は飯田新左衛門。名主・ 本陣の飯田家菩提寺。遊女 の墓あり。
遍照寺	仲宿40-7	天台宗(現 真言宗)	(現在、新勝寺・ 成田市)	大日山 (現成田山)	開山、寛文2年 (1625)寂		慶雲	不動明王	遊女道中の扁額あり。馬つ なぎ場跡、馬頭観音あり。
照伝寺	仲宿11-8	日蓮宗	身延山久遠寺	加賀山			順照院日喜	日蓮上人像	下屋敷菓草畑に創建され、 昭和51年に日蓮宗立正同 心教会、後に加賀山照伝寺 になった。
智清寺	大和町37-1	浄土宗	増上寺→ 知恩院・ 増上寺末	龍光山	応永年中 (1394~1427)?			阿弥陀如来	天正19年の家康朱印状あ り。文禄2年からの板橋家 位牌、慶安2年からの板橋 家の墓あり。
日曜寺	大和町42-1	真言宗	霊雲寺(文京区)	光明山			行基	宥慶	愛染明王
乗蓮寺	仲宿60番台	浄土宗	増上寺(港区)	狐霊山	開山、応永14年 (1407)寂	信譽無的		阿弥陀如来	天正19年の家康朱印状あ り。現在、赤塚5-28に移転。

いては、畠山聡氏の研究に詳しい⁷³。なお、ほかに宗仙寺(日蓮宗)が板橋2丁目にあるが、これは明治に入ってから大阪府から移ってきたものである⁷⁴。

神社は、板橋宿の鎮守として氷川神社(氷川町21番地8号)が祀られてきた。同社には富士塚が置かれ、板橋宿における富士信仰の一端を窺い知ることができる。

以上、板橋宿に関する研究史を整理してきた⁷⁵。このような研究状況にあることを踏まえて、本年度の授業では板橋宿の概要を掴むことを目的とする授業を行った。次章では、授業の実践例を報告することとしたい。

2 授業の実践例—2018年度の板橋宿フィールドワーク—

(1) 板橋宿を歩く

第1回目の授業では、まずは授業の進め方について説明した。課外授業が多いため、授業の振り替えと休講に気をつけること、グループワークで進めるが、このグループは教員の側で決定し、親しい者と同じグループにはなれないこと、など注意点を伝えた。その上で、板橋区の歴史について、古代から近代までの大まかな流れを解説した⁷⁶。第2回目は、板橋宿エリアの歴史を学ぶことを目的とした。具体的には中山道、板橋宿、板橋の語源である板橋、加賀藩下屋敷、幕末から明治の板橋宿、これらのテーマに沿って説明を加えた⁷⁷。学生は特に、江戸時代の板橋宿には遊女が多く見られたなど、現在とは異なる板橋宿の様子に興味を抱いたようであった。

第3回目の授業では、3コマ分の時間を使って、現地を実際に歩いてみた(2018年4月27日(金)に実施)。なお、事前に教員が下見を行い、コースの安全や時間配分等については確認をしている。フィールドワークを行ったコースは、地図に示した通りである。

まず板橋区公文書館前に集合し、縁切榎、板橋、高札場跡、脇本陣跡(板橋家跡)を訪れた。国道17号線を渡って氷川神社と境内にある富士塚を見学し、脇本陣跡(飯田右兵衛家跡)、本陣跡(飯田新左衛門家跡)、文殊院の遊女の墓、乗蓮寺跡、遍照寺跡を廻り、いたばし観光センター(板橋3丁目)で休憩を入れた⁷⁸。その後、脇本陣跡(豊田家跡)、観明寺、川越街道と分岐する平尾追分を確認してから、東光寺、加賀西公園にある圧磨機圧輪(黒色火薬製造機)のモニュメントを見学した。さらに、板屋公園前を通過して「東京市」と刻まれた公園入口の門の説明を行ってから、近年まで野口研究所があった板橋火薬製造所(東京第二陸軍造兵廠板橋製造所)跡を加賀公園から眺めた。同公園にある旧加賀藩下屋敷の築山であった小山にも登り、近代まで流通や火薬製造にも利用されていた石神井川の流路を見ることができた。その後、中山道へ戻ってJR板橋駅近くの近藤勇の墓を巡って解散した。

なお、フィールドワークでは、板橋区作成の1万分1地図を配布し、学生は地図に史跡の場所を書き込みつつ、教員による説明や板橋区が設置した史跡の案内板などのメモを適宜取りながら廻った。最後に、アンケート用紙を配布し、学生が調べてみたいと思ったテーマを第3候補まで書き出してもらい、それを回収した。

(2) グループワーク—報告書作成と発表—

学生のアンケートを踏まえて、本年度はテーマごとに5つのグループを作った。各グループのテーマと所属学生は、次の通りである。

- ① 中山道板橋宿の本陣・脇本陣：河崎直輝（3年次生）・石田大賀（2年次生）・立石和大（2年次生）・渡邊直輝（2年次生）。
- ② 加賀藩下屋敷：稲垣秀彦（4年次生）・高橋孝介（2年次生）・小倉祥平（2年次生）・松本隼輔（2年次生）。
- ③ 遊女と飯盛り女：横田宏輝（3年次生）・櫻井樹里（3年次生）・栗林優斗（2年次生）・高木宏泰（2年次生）。
- ④ 板橋宿近くの近藤勇の墓と豊田家：猪野晃希（2年次生）・岡本拓弥（2年次生）・鵜田晴哉（2年次生）・吉岡日陽子（2年次生）。
- ⑤ 板橋宿の寺社：高田泰周（4年次生）・今井陽基（3年次生）・阿部隼浩（3年次生）・田邊尚輝（2年次生）・柴山敢太（2年次生）。

これらの各グループに分かれ、第6～8回目の授業では、それぞれが与えられたテーマに沿って、まずは学内図書館などで所蔵する比較的入手しやすい郷土史関係の文献を収集した。グループ内でも役割分担を決め、研究史を整理した。第9・10回目の授業は、再び板橋区公文書館を訪れ、文献収集を行った。文献収集が終わったグループは現地を訪問し、報告書に必要な写真を撮るなどした。

第11～14回目の授業では、各グループで調べたことをまとめ、考察を加えたレポートを作成した。本授業では、史料や文献の引用の仕方、注の付け方、引用した文献の表記の仕方など、卒業論文の執筆に必要な知識を身につけることを目的の一つとしている。そのため、第13回目に一度レポートを提出させ、教員が訂正、加筆などの具体的な指示を加えて返却し、第14回目に完成版を提出することとした。またこの間は、授業時間内はグループで各自のレポートをまとめ、体裁を整えることを中心に行うこととしたため、各自のレポートは事前・事後学習で作成に取り組んだ。報告書の構成は、次の通りである。

【「2018年度日本地域史 報告書 板橋の歴史をあるく2—板橋宿周辺の地域—」の目次】

はしがき（遠藤ゆり子）…… i～ii 頁

第1章 本陣と脇本陣（河崎直輝・石田大賀・立石和大・渡邊直輝）…… 1～10 頁

はじめに／1 宿場を往来する人々／2 本陣と脇本陣／3 参勤交代時の本陣・脇本陣の様子
／4 板橋宿に存在する本陣・脇本陣／5 近代の板橋宿本陣・脇本陣／おわりに

第2章 加賀藩下屋敷（高橋孝介・小倉祥平・松本隼輔・稲垣秀彦）……11～16 頁

はじめに／1 加賀藩の下屋敷／2 建造物／3 加賀藩江戸屋敷の意義と機能／おわりに

第3章 板橋宿から見る「遊女・飯盛り女」（栗林優斗・高木宏泰・横田宏輝）……17～21 頁

1 「遊女」とは？／2 「飯盛り女」／3 江戸時代の「遊女」／4 「板橋の遊女・飯盛り女」／
おわりに

補論 飯盛り女（櫻井樹里）……22～25 頁

第4章 豊田家と近藤勇（猪野晃希・岡本拓弥・鵜田晴哉・吉岡日陽子）……26～34 頁

はじめに／1 脇本陣豊田家の系譜／2 板橋宿／3 近藤勇の生い立ち／4 板橋と近藤勇／
おわりに

第5章 板橋宿の寺社について

（高田泰周・今井陽基・阿部隼浩・田邊尚輝・柴山敢太）……35～39 頁

はじめに／1 寺院の歴史／2 板橋宿の寺院／おわりに

授業の最終日は、各グループのレポートを併せて、報告書『板橋の歴史をあるく 2』としてまとめ、各自に配布した。また、各グループが追究したテーマについて、パワーポイントを使って発表し、調査の内容を授業の履修学生全員で共有した。発表については、前年度に作成したルーブリックを使用し⁷⁹、グループで協議して発表したグループごとの評価を加えた。

(3) 成果と課題

まず、本授業の成果としては、学生が板橋宿の歴史を学ぶことを通して、①文献・史資料を収集し、②収集した文献・史資料を読み込んで要点を整理し、③課題を探して考察を加え、④レポートにまとめる、このような力を身に付けることができたことを指摘できる。特に文献・史資料の引用の仕方、参考にした際の注の付け方は、初めて学んだという学生も多く、完成までに何度も書き直しとなる者が少なくなかった。グループワークでは、④のグループ以外では3・4年次生が2年次生に教える場面も見られ、互いに学び合いながら作業を進めることもできた。また、一見、江戸時代の面影など全く見られないような板橋区内の街中においても、学生たちが実際に現地を歩くことで、道や区画などから当時の様子が垣間見られることを実感し、フィールドワークを行う意義を理解できたと思われる。

だが、いくつか課題も明確になった。1つはグループ編成をめぐる問題である。授業では、繰り返しグループは知人・友人同士で自由に決められるのではなく、教員が決定する旨を伝えていた。学年も異なる学生同士が協力し合えるよう、第6回目までは授業開始時にアイス・ブレイクを行うなど、互いに話し合い、共同で作業をしやすい雰囲気づくりに努めた。しかし、それでもグループワークを行う期間が長い場合、グループによっては問題が生じてしまった。今後はさらに、十分な説明を繰り返すとともに、事前に学生同士の事情を理解するため、学生からの相談を受け付ける機会を設けるなどの工夫をしていきたい。

2つ目の課題は、グループ内での役割分担の大きさに、学生によって差が出てしまったことである。所謂フリーライダーが生まれてしまったグループもあった。ただ、結果としてフリーライダーになってしまった学生のなかには、論文を読み込んで要約し、文章にまとめることが難しい、また他の学生とコミュニケーションをとることが難しい学生もいた。本キャンパスでは他キャンパスや他大学のように、学生が専門家から学習面でのサポートを受けられる環境にはなく、教員が工夫をするしかないのが現状である。個々の学生の状況に応じて、教員が何らかのサポートを適宜行ってグループワークに参加させるか、別メニューを検討して個別に対応するか、柔軟に対応していきたいと思う。また今後は、レポートを提出する際、誰がどの文章の執筆を担当したのか、文責者を明示させて役割分担を明確にするなど、フリーライダーを生むことを防ぐ工夫をし、グループ内における学生の不満も解消させていきたい。

3つ目は、インターネット上の写真を無断で報告書に転載しようとした学生がいたことである。本授業においても、文献であろうと、インターネット上の文章や写真、画像であろうと、典拠を示さずに無断でレポートに載せることは厳しく禁じてきた。だが、その意味を十分に理解しなかったのか、安易に無断掲載しようとした学生がいた。今後も、それが重大な問題であることを繰り返し説明するとともに、教員が訂正、加筆などを行う段階でもよく確認し、無断で掲載していると思われる場合は、個別に対応をしていくことが必要となる。

4つ目は、時間的な問題でもあるが、学生たちが必要な文献・史料の収集をし、読み込むことが充分にはできなかったことを指摘できる。取り上げるテーマをもっと絞って文献・史料を限定する、また教員もある程度助言を加えることで、解決できる面もあったと思われる。次回に向けて改善策を考えていきたい。

このように、課題も多く残されてはいる。しかし本授業により、学生たちは大学が所在する地域の歴史をより深く理解するとともに、歴史学の研究手法を身につけ、卒業論文の執筆に向けて準備を進めることができたと思われる。

おわりに

本稿では、板橋宿の研究史を整理した上で、2018年度の日本地域史の授業で板橋宿を取り上げた実践例を紹介し、その成果と課題について述べてきた。本年度の授業を振り返ると、研究状況の把握と現地調査という基本を押さえることに終始してしまった感がある。だが、板橋宿に関しては、「飯田侃家文書」をはじめ、「豊田家文書」「伊勢孫文書」など史料は比較的豊富だといえる。そのような史料は、すべてが翻刻・紹介をされているわけではなく、史料の分析を進めていくことで、新たな発見を生み出せる、そのような余地があると考えられる。

そこで来年度は、史料目録から注目すべき史料をピックアップした上で、授業で史料収集調査を実施し、分析を加えていくこととしたい。それにより、学生が近世史料の調査方法を身につけ、史料を翻刻し、史料を読み込み、分析を加える力を身につけられるものと思う。紙幅も尽きたため、最後にこのような課題を提示して、擱筆することとしたい。

【註】

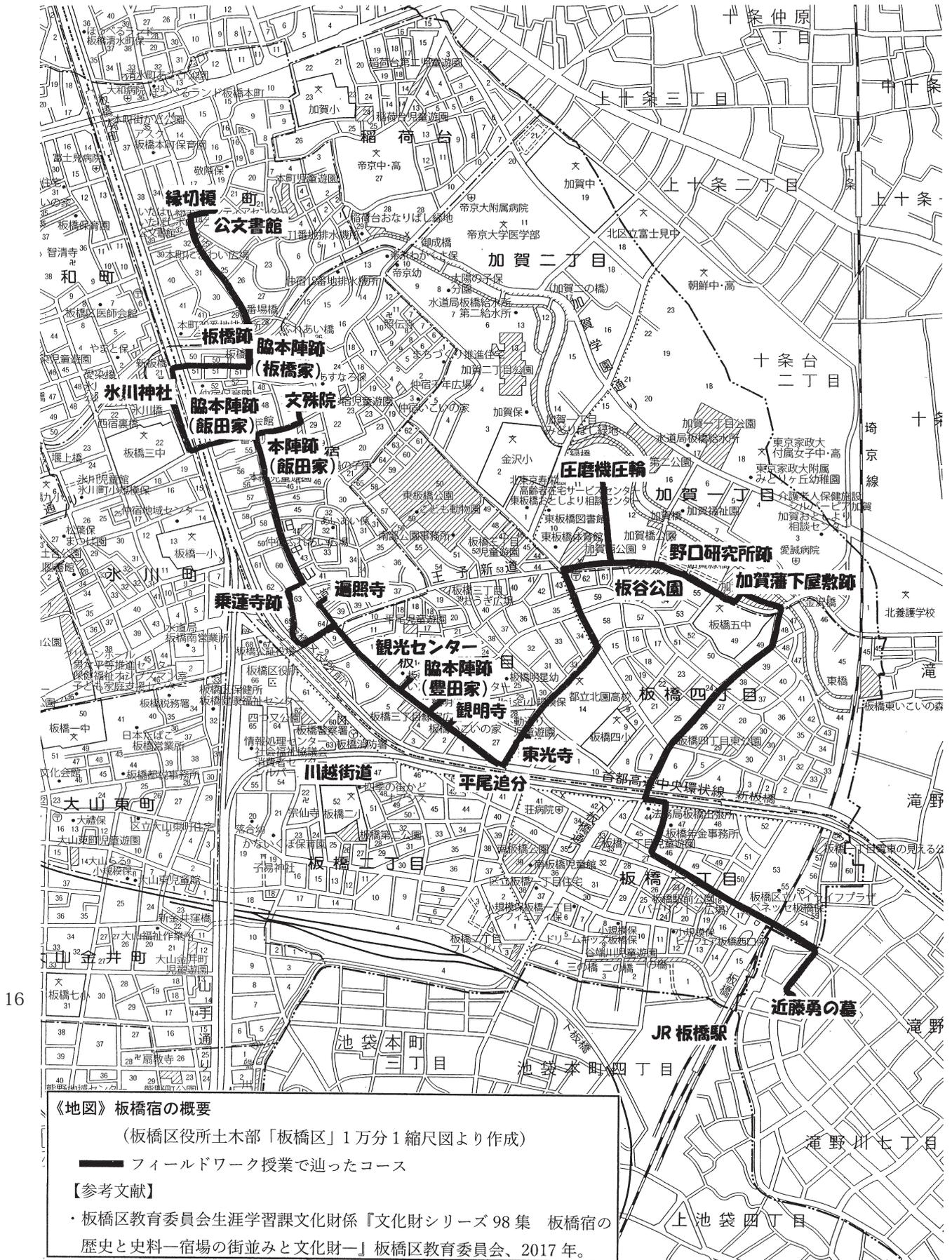
- 1 稲村太郎「宿場町の概況」(板橋区史編さん調査会編『板橋区史 通史編』上巻、第3章第1節、板橋区、1998年)。
- 2 中野達哉「宿場町の機能と運営」(前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第3章第2節)。
- 3 板橋区教育委員会事務局社会教育課編『文化財シリーズ第8集 いたばしの街道めぐり』(板橋区教育委員会、1971年)。
- 4 板橋区教育委員会事務局社会教育課『文化財シリーズ第45集 いたばしの古道』(板橋区教育委員会、1983年)。
- 5 小花波平六「板橋宿の生活と民俗—江戸末期中山道・板橋宿の場合—」『板橋区立郷土資料館紀要』7号、1988年。
- 6 小花波平六「板橋宿の生活と民俗(二)—中山道・板橋宿の場合—」『板橋区立郷土資料館紀要』8号、1990年。また小花波氏は、平尾の一里塚近くの茶屋「まんじゅうや」の子孫を訪ね、聞き取り調査も行っている(「私と板橋 平尾のまんじゅう屋—板橋一丁目 大野敬之助氏を訪ねて—」『いたばし区史研究』3号、1994年)。
- 7 中西真郎「板橋宿細見(前編)」『板橋史談』第133号、1989年。同「板橋宿細見 後編(一)」同135号、1989年。同「板橋宿細見 後編(二)」同138号、1990年。同「板橋宿細見 後編(三)」同142号、1991年。
- 8 板橋区教育委員会社会教育課編『中山道と板橋宿—夜明け前の世界—』(板橋区教育委員会、1992年)。
- 9 板橋区立郷土資料館・埼玉県立博物館・長野県立歴史館・岐阜県博物館・野洲町立歴史民俗資料館・草津宿街道交流館編・刊『街道開設四百年記念「中山道」』(2002年)。
- 10 中野達哉「明治初年板橋宿の住民構成」(板橋区立郷土資料館 小西雅徳編『特別展 板橋の近代のあゆみ』板橋区立郷土資料館、1998年)。同「宿場町の生活とつきあい」(前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第6章第4節)。
- 11 吉田政博「史料から見る19世紀前半の板橋宿—その再現の試み—」『板橋区立郷土資料館紀要』14号、

2002年。

- 12 中村陽平「板橋宿の木戸・関門についての一考察」『板橋区立郷土資料館紀要』18号、2011年。
- 13 玉井建三「板橋宿の地域構造とその変貌(1)」『聖カタリナ大学短期大学部研究紀要』17号、2005年。
玉井建三「板橋宿の地域構造とその変貌(2)」『聖カタリナ大学短期大学部研究紀要』18号、2006年。
玉井建三「板橋宿の地域構造とその変貌(3)」『聖カタリナ大学短期大学部研究紀要』19号、2007年。
- 14 板橋区地名調査団編『いたばしの地名』(板橋区教育委員会、1995年)。大澤鷹邇「写真探訪 板橋の地名(1) 番場」『板橋史談』239号、2007年。同「写真探訪 板橋の地名(2)「山中」」同241号、2007年。
- 15 中野達哉「街道の整備」(前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第4章第1節)。
- 16 板橋区教育委員会生涯学習課文化財係編『文化財シリーズ98集 板橋宿の歴史と史料—宿場の町並と文化財—』(板橋区教育委員会、2017年)。
- 17 板橋史談『武州板橋誌』(1976年)。
- 18 伊藤専成「宿場聞き書き」『板橋史談』第4号、1966年。
- 19 玉井前掲註13「板橋宿の地域構造とその変貌(1)」。
- 20 仲町52番地とするものもある(前掲註3『いたばしの街道めぐり』)。
- 21 伊藤専成「板橋宿の本陣と脇本陣」(児玉幸多監修・特別展江戸四宿実行委員会編『特別展 江戸四宿』特別展江戸四宿実行委員会・品川区立品川歴史館・板橋区立郷土資料館・足立区立郷土博物館・新宿区立歴史博物館、1994年)。これは、昭和40年代後半に伊藤氏が執筆した「中山道板橋宿誌稿」(未刊)であり、多少の誤謬も見られるが、昭和30年代当時の聞き取りなどの成果をまとめたものとして評価されている。
- 22 前掲註3『いたばしの街道めぐり』。
- 23 板橋区(2018)「名所・旧跡」板橋区(2018年10月16日取得、http://www.city.itabashi.tokyo.jp/c_kurashi/035/035607.html)。
- 24 豊田家は、板橋3丁目15番地に所在した(奥山正『加賀藩江戸下屋敷』『加賀藩江戸下屋敷』刊行会、1987年、20頁による)。
- 25 前掲註玉井注13「板橋宿の地域構造とその変貌(2)」。
- 26 伊藤前掲註21「板橋宿の本陣と脇本陣」。
- 27 中野達哉・吉田政博「下板橋宿名主飯田侃家文書について」『いたばし区史研究』4号、1995年。
- 28 中野達哉「近世前期中山道板橋宿の名主・問屋役について」『駒澤史学』55号、2000年。
- 29 中村陽平「中山道板橋宿における本陣の成立と御茶屋・御林」『板橋区立郷土資料館紀要』20号、2015年。
- 30 前掲註3『いたばしの街道めぐり』によれば、同家は明治23年(1890)に火事で焼けたという。
- 31 和宮の下向と板橋宿の関係については、長谷川正次「幕末・維新期の宿駅と助郷」(前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第3章第2節)などに詳しい。
- 32 中村陽平「板橋宿飯田家の系譜と本陣・名主役」(前掲註16『板橋宿の歴史と史料』所収)。
- 33 伊藤前掲註21「板橋宿の本陣と脇本陣」。
- 34 中野達哉「明治初期、中山道板橋宿旧名主・問屋家と旧大名家との交流」(前掲註16『板橋宿の歴史と史料』所収)。
- 35 吉田政博「松本藩戸田家家臣板橋家所蔵文書の紹介と検討—系図・系譜を中心として—」『板橋区立郷土資料館紀要』13号、2001年。
- 36 伊藤専成氏による聞き取りによれば、昭和30~40年代は「げんか」と呼ばれていたという(伊藤前掲註21「板橋宿の本陣と脇本陣」)。
- 37 小林保男「脇本陣豊田家の系譜」(板橋区立郷土資料館編『板橋区立郷土資料館企画展 中山道板橋宿 平尾宿—脇本陣豊田家』板橋区立郷土資料館、1991年)。
- 38 小西雅徳「茶道(煎茶)」(前掲註37『中山道板橋宿 平尾宿—脇本陣豊田家』所収)。小西雅徳「板橋宿と煎茶道—豊田喜平治の世界—」『板橋区立郷土資料館紀要』10号、1994年。同「豊田喜平治の煎茶作

- 法について」『板橋区立郷土資料館紀要』13号、2001年。
- 39 小林保男「建物(建造物)」(前掲註37『中山道板橋宿 平尾宿一脇本陣豊田家』所収)。
- 40 豊田家から寄贈された屏風・額・襖の下張り文書が発見され、板橋区によって整理されている(小林靖「古文書・古記録(豊田家文書)」(前掲註37『中山道板橋宿 平尾宿一脇本陣豊田家』所収)。なお、同家伝来史料の一部については、『板橋史談』でも紹介されている(古文書部「平尾豊田家文書(一) 郷土の古文書(四十四)」『板橋史談』160号、1994年。同「平尾豊田家文書(二) 郷土の古文書(四十五)」『板橋史談』161号、1994年。同「平尾豊田家文書(三) 郷土の古文書(四十六)」『板橋史談』162号、1994年)。
- 41 小林靖「豊田家をめぐる人々」(前掲註37『中山道板橋宿 平尾宿一脇本陣豊田家』所収)。
- 42 中野達哉「中山道板橋宿の特質とその形成」(前掲註21『中山道』所収)、同「中山道板橋宿の旅籠屋について—豊田家文書の屋敷間取り図の分析を中心として—」『板橋区立郷土資料館紀要』15号、2005年。
- 43 中野達哉「宿場町の生活とつきあい」(前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第6章第4節)では、旅籠伊勢孫などについても考察を加えている。
- 44 長谷川正次「交通の諸相」(前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第8章第3節)。
- 45 小西雅徳・小島有紀子「板橋宿旅籠平野屋飯田家伝来の加賀藩雜道具について」『板橋区立郷土資料館紀要』18号、2011年。
- 46 佐藤正一「板橋遊郭偶考」『板橋史談』第3号、1966年。同「板橋遊郭偶考(二)」同4号、1966年。同「板橋遊郭偶考(三)」同5号、1966年。
- 47 前掲註3『いたばしの街道めぐり』。
- 48 板橋区立郷土資料館 小西雅徳編『特別展 板橋の近代のあゆみ』(板橋区立郷土資料館、1998年)。
- 49 小林保男「加賀下屋敷とその跡地の変遷について」(前掲註8『中山道と板橋宿一夜明け前の世界—』所収)。
- 50 海野修「加賀藩下屋敷関係基本史料(『加賀藩史料』)の出典索引ならびに論考等の一覧」『板橋区立郷土資料館紀要』13号、2001年。
- 51 奥山正『加賀藩江戸下屋敷』(『加賀藩江戸下屋敷』刊行会、1987年)。
- 52 加賀藩の参勤交代に関する研究については、板橋区立郷土資料館小西雅徳編『板橋区・金沢市友好交流都市協定締結記念 中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』(板橋区立郷土資料館、2010年)で紹介されており、参照されたい。なお、同書では小松寿治氏が「東武道中輯録」の史料紹介をしている。
- 53 海野修氏は、舟運は確認できず、地形的にも不可能だと判断できるとする(同「加賀藩下屋敷」前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第5章第3節)。
- 54 板橋区教育委員会編『文化財シリーズ60集 加賀藩江戸下屋敷 平尾邸拝領一件』(板橋区教育委員会、1989年)。その時の調査については、小林保男「加賀藩江戸下屋敷『平尾邸拝領一件』文書について」(同前書所収)に詳しい。
- 55 吉田政博「加賀藩下屋敷関係の史料について—絵図の検討を中心に—」『いたばし区史研究』2号、1993年。
- 56 小花波平六「加賀下屋敷と板橋宿、宿場の人たちとの交流」『板橋区立郷土資料館紀要』10号、1994年。
- 14 57 中西真郎「飯田家(本陣及名主)」(板橋史談『武州板橋誌』1976年)。
- 58 海野修「加賀藩下屋敷に詰めていた人々」(前掲註52『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』所収)。
- 59 海野修「加賀藩下屋敷と足軽—先祖由緒并一類附帳」の検討を中心に—」『いたばし区史研究』5号、1996年。同「加賀藩下屋敷」前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第5章第3節。
- 60 長谷川正次「加賀藩拝領屋敷関係資料—下屋敷を中心として—」『いたばし区史研究』3号、1994年。
- 61 奥山正『加賀藩江戸下屋敷』(『加賀藩江戸下屋敷』刊行会、1987年)。
- 62 辻崎久哲「加賀藩江戸藩邸の変遷と板橋平尾邸」『板橋区立郷土資料館紀要』11号、1996年。
- 63 海野修氏は、天和3年(1617)に上中下屋敷地が定着を見たという(同「加賀藩下屋敷」前掲註1『板橋区史 通史編』上巻、第5章第3節。同「加賀藩下屋敷平尾邸での暮らしと屋敷の機能」前掲註52『中山

- 道板橋宿と加賀藩下屋敷』所収)。
- 64 辻崎氏は、伊藤専成氏が指摘した、参勤交代時の装束屋敷としての利用については、不明ではないかと指摘する(前掲注21「板橋宿の本陣と脇本陣」)。だが海野修氏は、加賀藩第11代藩主前田治脩の手記から、安永元年(1772)・同3年(1774)に下屋敷で装束を直したことを紹介しており、利用される場合もあったと思われる(同「加賀藩下屋敷平尾邸での暮らしと屋敷の機能」(前掲注52『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』所収)。
 - 65 吉田政博「加賀藩江戸下屋敷平尾邸をめぐる一下屋敷絵図の検討を中心に一」(前掲注52『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』所収)。
 - 66 小西雅徳「加賀藩下屋敷の幕末状況一特に西洋式調練と大砲鑄造について一」(前掲注52『中山道板橋宿と加賀藩下屋敷』所収)。
 - 67 板橋区教育委員会事務局社会教育課文化係編『文化財シリーズ第10集 中山道板橋宿 加賀下屋敷跡 払下文書 上』(板橋区教育委員会、1970年)。同編『文化財シリーズ19集 中山道板橋宿 加賀下屋敷跡 払下文書 下』(板橋区教育委員会、1976年)。
 - 68 板橋区教育委員会事務局社会教育課文化財係『文化財シリーズ第36集 板橋区 神社』(板橋区教育委員会、1981年)。同『文化財シリーズ第39集 いたばしの寺院』(板橋区教育委員会、1982年)。吉田政博「板橋の諸寺院」(前掲注1『板橋区史 通史編』上巻、第10章第1節1)。小林保男「宿村の神社」(前掲注1『板橋区史 通史編』上巻、第10章第2節)。
 - 69 前掲注3『いたばしの街道めぐり』。
 - 70 板橋区教育委員会『増補版 文化財シリーズ7 乗蓮寺文書 中山道板橋宿』板橋区教育委員会、1970年。
 - 71 小西雅徳「板橋宿と煎茶道一豊田喜平治の世界一」『板橋区立郷土資料館紀要』10号、1994年。
 - 72 海野修「加賀藩下屋敷」(前掲注1『板橋区史 通史編』上巻、第5章第3節)。
 - 73 島山聡「東光寺の宇喜多秀家供養塔について」『板橋史談』201号、2000年。
 - 74 前掲注68『いたばしの寺院』。
 - 75 授業では伝馬役については取り上げなかったため、伝馬役に関する研究史は扱わなかった。
 - 76 この授業で主に参考にしたのは、板橋区史編さん調査会編『区政60周年記念 図説 板橋区史』(板橋区、1992年)、前掲注1『板橋区史 通史編』上巻である。
 - 77 主な参考文献は、前掲注1『板橋区史 通史編』上巻、前掲注8『中山道と板橋宿一夜明け前の世界一』である。
 - 78 いたばし観光センターでは、ボランティアの方々が学生に板橋宿の説明をして下さった。この場をお借りしてお礼を申し上げたい。
 - 79 このループブックは、拙稿「志村延命寺・前野町東熊野神社・志村熊野神社の石造物調査一板橋区志村地域におけるフィールドワーク授業の実践例一」(『淑徳大学 人文学部 研究論集』第3号、2018年)に掲載した。



16